マヤ社会における球戯の儀礼性について
―文書史料・考古資料を手がかりにして―

文学研究科歴史学専攻 博士課程前期一年
槙　本　まゆみ

はじめに

マヤ文明に関しては、これまで多くの概説書が出版されてきた。それらはよくまとめられているが、本稿のテーマとする球戯に関して言えば、球戯としての一般的な要素は知られているにも関わらず、そのマヤの球戯の持つ独自性は未だ謎に包まれている。これまでに、文書史料や考古資料からの研究により、球戯[1]は娯楽としてあっただけでなく、政治的、宗教的要素を含む儀礼であったとされている。本稿では先行研究によりながら、球戯の儀礼性を考察し、今後の研究課題を明らかにしたい。

球戯について

先コロンブス期におけるマヤを含むメソアメリカ全域では、トウモロコシを主体とした農耕、ピラミッド建設、記念碑建設、暦、文字など多数の文化的な共通要素が認められる。球戯もその文化的要素の一つであり、石造・土製の球戯場はメソアメリカ全域に分布する[2]。

球戯場の多くは二つの建造物に挟まれた形状で作られたI字型の空間を持ち、両端が閉鎖あるいは開放した構造をしている。このような構造上の特徴を持つ球戯場のほとんどは遺跡中心部の神殿に隣接し、その球戯場や神殿から発見された図像表現の中に、人身供犠を示す描写をみてとれることから、球戯の儀礼性が指摘されてきた。

先行研究について

これまでに、マヤ社会において球戯が行われていたことは、建造物、文書史料、神話からもみてとれる。先行研究によりながら球戯に関する主な説を挙げると、次のようになる。

①宮廷儀礼としての球戯

球戯は戦争捕虜を供する国家的な行事であり、王権に関わる役割を担っていたことが明確にされつつある。この種の球戯は、戦争や即位の際に行われ、出場者は貴族や王であった[3]。特別な祭典としての球戯では戦争捕虜となった王に球戯を行わせ、球戯終了後に打首や人身供犠にしたとされている[4]。そこでは、球戯自体も国家権力や栄華を民衆に見せ付けるための祭典であった可能性が高い。

②神話との関連性を示す儀礼的な球戯

球戯の最終段階に球戯場、もしくは神殿では、犠牲的行為が行われていたとされる[5]。この儀礼的な球戯を表した場面に描写された競技者の服装、姿勢、身に付けている付属物などすべてに、マヤ独自の美術様式で象徴的な意味付けがなされている。そして、しばし

ば競技者は神々の扮装した姿で描かれているが、これらに関しては、球戯と神話との関連性を示している。

③球戯の象徴性

メソアメリカの人々が球戯に天体の運行、特に太陽、月、金星の動きの暗喩をみていた。これは、球は天体の軌道を再現し、球戯場全体は宇宙の暗喩としてみるもので、この見方により球戯場は球戯を行うことで滞りなく天体が回ることを祈った祭儀場であったという可能性も指摘されている[16]。少なくとも王が球戯の参加者の一人であったという事実は、王が儀礼の神官であり、神々と人間をつなぐ仲介者とみなされていた点から考えると、球戯場での儀礼の意義を多少なりとも推測することができるだろう。

おわりに

本稿では、球戯に関して代表的ないくつかの先行研究を取り挙げ、球戯の持つ儀礼性を明らかにしようとしてきた。従来の研究で、遺構や遺物から、球戯そのものの存在や役割を示唆できる。しかし、碑銘学・図像学研究からの仮説的解釈では、球戯が宗教的要素を帯びたものとしてみることは未だ不十分である。

今後の研究課題として、マヤ社会における球技の意義、そして宗教を利用した国家の支配システムについて考察する。すなわち、なぜ球技が人身供犠と並ぶ宗教儀礼の一つであったのか、なぜ戦争の際に、捕らわれた王に球技を行わせたのか、そしてなぜ王が犠牲にされていたか、つまり球戯の宗教儀礼的役割、宮廷儀礼的役割を明らかにしていく必要がある。その際、取り扱う文書史料に関しては、その信憑性も考慮したい。

注

（1）球戯は紀元前2000年頃からメソアメリカで行われている。球技者や球戯の様子は土器、石彫、壁画などの考古資料や民族誌、神話といった文書史料に記録されている。数人の二チームで行った球戯は、ヨークと呼ばれる防具を腰に付けた球戯者たちが一つの固いゴム球を尻や腰のみで打ち、得点場にあてたときに点が獲得されるものであった。関雄二／青山和夫編著、「球技」『岩波　アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店、二〇〇五年、二三六～二三七頁。

Mary, Ellen Miller and Schele, Linda, The Blood of Kings, Dynasty and Ritual in Maya Art.Gerge Braziller, Inc, New York, 1986,pp242-243.

（2）メアリ・ミラー／カールタウベ／武井摩利訳『マヤ・アステカ神話宗教辞典』東洋書林、二〇〇〇年。

（3）遺跡Qの石板1の碑文には、古典期のマヤ都市カラクルムに従属していたラ・コロナの王がカラクルムで球戯を行ったことを記録しており、球戯が宮廷儀礼であったことを示している。関雄二／青山和夫編著、「球技」『岩波　アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店、二〇〇五年、二三六～二三七頁。サイモン・マーティン／ニコライ・グルーベ／長

谷川悦夫他訳『古代マヤ王歴代誌』創元社、二〇〇〇年、一六一頁。

（4）マヤ社会の主要なセンターであったティカル、ドスピラス、ウシュマルの石碑には、王がしばしば捕獲・人身供犠にされていたことが記録されている。関雄二／青山和夫編著「人身供犠」『岩波　アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店、二〇〇五年、三〇八頁。

（5）ヤシュチラン遺跡の神殿33の正面階段の石材に彫刻された13個の石板の発見により、古典期マヤの球戯では、人身供犠が行われていれたことが確かめられた。碑文の階段2の七段目の石板には象徴的な球戯の場面が彫刻されている。中央に位置する三つの石材には、三人の地下世界の神を斬首するという内容の神話が語られており、この物語はマヤの儀礼的な球戯の概念の中核をなすと考えられている。サイモン・マーティン／ニコライ・グルーベ／長谷川悦夫他訳『古代マヤ王歴代誌』創元社、二〇〇〇年、一八九～一九一頁。

（6）メアリ・ミラー／カールタウベ編／武井摩利訳「球技」『マヤ・アステカ神話宗教辞典』東洋書林、二〇〇〇年、一〇六～一〇八頁。

〈参考文献〉

・関雄二／青山和夫編著『岩波　アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店、二〇〇五年。

・サイモン・マーティン／ニコライ・グルーベ／長谷川悦夫他訳『古代マヤ王歴代誌』創元社、二〇〇〇年。

・メアリ・ミラー／カールタウベ編／武井摩利訳『マヤ・アステカ神話宗教辞典』東洋書林、二〇〇〇年。

・レシーノス，A編／林屋永吉訳『ポポル・ブフ』中公文庫、一九九七年。

・ソリタ／ランダ／小池佑二訳『ヌエバ・エスパーニャ報告書・ユカタン事物記』（大航海時代叢書　第二期 十三巻）岩波書店、一九八二年。

・モトリニーア／小林一宏訳『ヌエバ・エスパーニャ布教史』（大航海時代叢書　第二期 十四巻）岩波書店、一九七九年。

・Mary, Ellen Miller and Schele, Linda, The Blood of Kings, Dynasty and Ritual in Maya Art. :Gerge Braziller, Inc, New York, 1986.

・Sherer,Robert J , The Ancient Maya, Fifth Editions. : Stanford University Press, Stanford, 1994.

・David A. Freidel. , Linda Schele, Maya Cosmos, Three Thousand Years on the Shaman's Path. :Harper Collins Publishers Inc, New York, 1993.

・Vernon L. Scarborough, The Mesoamerican Ball-game.: Univ of Arizona Pr, 1993 .